



No.65 2020.7.21

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

管理職 Meet 体験“Zoom de Meet”が無事終了しました ありがとうございます

6月に開催した「管理職 Zoom 体験会」に続き、22名の先生方に参加いただき、清重教育長も飛び入りで参加された「管理職 Meet 体験 “Zoom de Meet”」が7月15日に無事終了しました。前回体験した Zoom 上で Meet の説明後、Meet に各自で接続するという流れですが、スタートするとカメラが背面カメラになっていたり、音声につながりにくかったりフリーズしたりとトラブルもありましたが、同じようなトラブルを経験された方からのアドバイス等でなんとか乗り切ることができました。やっぱりやってみないとわからないですね。私自身がコミュニティ創造協会さんの「オンライン会議の体験講座」での体験を頭の中でイメージしながらの進行でしたが、何回か体験していたことがすすめる上で大きな力となりました。限られた回数と時間でしたが、今こうした経験を積み重ねながらノウハウを貯めていかなければいけないと思っています。

そして、保護者や地域の方にも体験してもらえる場をつくっていくことが、「社会に開かれた教育課程」につながっていくと考えています。そういった意味で、朝霧小コミュニティ・スクールが計画されている「つなげてみよう つながってみよう Zoom 体験会」は、オンライン会議を体験する中で学校・家庭・地域の対話の土俵が出来ていくのではと期待しています。

「つなげてみよう つながってみよう Zoom 体験会」

朝霧小コミュニティ・スクール学校運営協議会さんは、現在のような状況でも、交流を止めないために、“学校を まちを 元気に”を合言葉に、“できる交流”の第一歩として Web 会議の活用を探るために「つなげてみよう つながってみよう Zoom 体験会」を計画されました。体験コースは、インストールも不安なので、実際に集まって体験するという A コースと、インストールは大丈夫なので、テレビ会議を体験という B コースの2つのコースを設定されています。体験の中でちょっとした対話も生まれてくるのではと思っています。現在のところ8月夏休み明けからになる予定ですが、またご報告させていただきます。また、“うちでも”と興味・関心を持たれましたらご連絡いただけたらと思います。

“N 高”ってご存じですか？

最近ニュース等で N 高の名前を耳にすることが増えてきました。先日も Yhoo ニュースで産経新聞の記事として N 高が取り上げられていましたのでご紹介させていただきます。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/6d31e0815e8e5febe13429368a7035332b56ecd9>

吉村知事も注目の「N 高」とは… コロナ後の社会における教師の役割を問う

ウイルスの感染再拡大が懸念される中、学校法人「角川ドワンゴ学園」が運営する通信制「N 高校」の教育手法に注目が集まっている。平成28年からオンライン授業を行い、不登校や病気で通学できない生徒らの受け皿になっているだけでなく、多忙な生活を送る著名人も在籍。大阪府の吉村洋文知事も関心を示しており、コロナ後の社会における教師の役割や学校のあり方を考える上でのヒントになりそうだ。

■先生はいらない？

「N高の取り組みはすごく面白い。私学だからできる部分もあるが、(ほかの学校に) もっと広げていったらいいのでは」

6月末、全府立学校159校でオンライン授業の環境が整ったことを発表した吉村氏は、記者団にこう述べた。これには理由がある。その4日前、吉村氏はインターネット番組で同法人理事の夏野剛(たけし)、川上量生(のぶお)の両氏と鼎談(ていだん)していたのだ。……………

吉村氏は番組で、N高のオンライン授業に触発されたのか「先生全員が教える必要はない。うまい人がオンラインで一斉に教えればいい」と主張した。さらに「突き詰めれば先生不要論になる」として、教師の役割がコロナ後の社会で変わる可能性に言及した。

■「本当のプロ」

大阪府の公立学校は6月に通常授業が再開されたこともあり、オンライン授業の本格実施の見通しはまだ立っていない。コロナ後を見据え、N高の教育はどういった点が参考になるか。

教育政策に詳しく、東京大と慶応大で教授を務める鈴木寛・元文部科学副大臣によると、海外ではオンラインと対面のハイブリッド(複合)に関する議論が主流になりつつあるという。

「N高はハイブリッド型教育のモデル」とみる鈴木氏は「日本はオンライン授業の教材に使えるデジタルコンテンツが豊富だ。公立学校でも活用したほうがいい」と提案する。

ただオンライン授業にも課題はある。鈴木氏は「多感な生徒を机に向かわせ、脱落を防ぐことは対面授業に比べて難しい。N高はそのノウハウを蓄積しているのだろう」と語り、今後の教師の役割を次のように説く。「グローバル時代の学校は今まで以上に多様な人間関係を構築する場という側面が強くなり、教師は授業をするより、生徒の疑問や悩みに答える役割が大きくなる。生徒のレベルや環境に合わせて対応をカスタマイズすることが不可欠だ」

教師は「本当のプロフェッショナル」(鈴木氏)として、これまで以上に高い資質が求められることになる。

コロナ禍後については教育だけでなく、社会の仕組自体が様々な場面で議論されています。そうした議論にも耳をかたむけながら今後の学校の在り方を考えることは急務になってきているのではと思います。その中で教師の仕事や役割も上記の記事で鈴木寛先生が「グローバル時代の学校は今まで以上に多様な人間関係を構築する場という側面が強くなり、教師は授業をするより、生徒の疑問や悩みに答える役割が大きくなる。生徒のレベルや環境に合わせて対応をカスタマイズすることが不可欠だ」と述べているように“変化できる”準備をしていく必要があると考えます。そうしたことを考えている時にネットで目にした「教師崩壊～先生の数足りない、質も危ない～」(妹尾昌俊著 PHP新書)をプチってしまいました。まだ読み切れていませんが次の“5つの「ティーチャーズ・クライシス」と打開策”で構成されています。

- ①教師が足りない(担任がいらない、授業ができない、優秀な人が来ない)
- ②教育の質が危ない(読解力の低下、少ない公的資金、受け身の生徒の増加)
- ③失われる先生の命(長時間労働、うつ病の増加、死と隣り合わせの学校現場)
- ④学びを放棄する教師たち(理不尽な校則、画一的な指導、考えなくなった先生)
- ⑤信頼されない教師たち(多発する不祥事、失敗から学ばない学校、教育行政)
- ⑥教師崩壊を食い止める！(ティーチャーズ・クライシスの打開策)



現状を知り、コロナ禍後の教育を考える上でのヒントがあるのではと思っています。

(文責：北本)